

2020 年 10 月 18 日（日）「富を用いる賜物」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 5:17-19

- 17 見よ、私が幸せと見るのは、神から与えられた短い人生の日々、心地よく食べて飲み、また太陽の下でなされるすべての労苦に幸せを見いだすことである。それこそが人の受ける分である。
- 18 神は、富や宝を与えたすべての人に、そこから食べ、その受ける分を手にし、その労苦を楽しむよう力を与える。これこそが神の賜物である。
- 19 人は人生の日々をあまり思い返す必要はない。神がその心に喜びをもって応えてくれる。

《新改訳 2017》伝道者の書 5:18-20

- 18 見よ。私が良いと見たこと、好ましいこととは、こうだ。神がその人に与えたいのちの日数の間、日の下で骨折るすべての労苦にあつて、良き物を楽しみ、食べたり飲んだりすることだ。これが人の受ける分なのだ。
- 19 実に神は、すべての人間に富と財を与えてこれを楽しむことを許し、各自が受ける分を受けて自分の労苦を喜ぶようにされた。これこそが神の賜物である。
- 20 こういう人は、自分の生涯のことをあれこれ思い返さない。神が彼の心を喜びで満たされるからだ。

【序論】

5～6 章と二つの章を跨いで「富」に関する事柄を学んでおります。もうしばらくこの話題は続くのですが、ここ 5 章の終わりにおいて「富」に関するコヘレトの小さな結論（信仰をもって「富」を考えたところの結論）が出てきましたので、一つの区切りと理解しておくことができるでしょう。

人の人生には大なり小なりお金が与えられます。それは、子どもの頃から、少額であったとしても、おこづかいやお駄賃として手にするものです。特別な事情がない限り、1 円も持ったことがないまま、あるいは使ったことがないまま人生を終えていく人はいません。また、人生の時期ごとに、その時に抱いている興味関心、あるいは取り組まなくてはならない課題によって、お金を投ずる場所が変わってきます。子どもならお菓子やゲーム程度かもしれませんが、子育て世代にとっては教育費に多くをつぎ込まなくてはならないでしょう。現役を退いた日のことは私にはまだあまり想像が付きませんが、余裕があれば趣味や周囲のサポートに費やしたいと願っています。いずれにせよ、人生で与えられる「限りある富」をどう用いていくかが人間一人ひとりの課題と言えます。その意味で、私は「富」とは「賜物」の一つだと理解しています。

【本論】

今日の箇所を読んで、どこかで聞いたことがあると感じられた方もいらっしゃるでしょう。そう、以前に学んだ 2:24-26、3:12-13、3:22 と多くの類似点があるのです。共通する内容は、8:15、9:7-10、11:7-10 にも出てきますので、本書で万遍なく扱われているテーマと言えるでしょう。つまり、コヘレトの思想の中心と言っても過言ではありません。しかし、その内容には少しずつ進展が見られますので、これまでと違う部分はどこなのかを注意深く読み取っていきたいと思います。

本論 1. 神から与えられたものを楽しめ

見よ、私が幸せと見るのは、神から与えられた短い人生の日々、心地よく食べて飲み、また太陽の下でなされるすべての労苦に幸せを見いだすことである。それこそが人の受ける分である。(5:17)

本節での語られ方は、2:24（**食べて飲み、労苦の内に幸せを見いだす。これ以外に人に幸せはない**）に比べて幾分断定的です。以前は嫌々ながら運命を受け入れていたコヘレトでしたが、ここに来てもっと積極的に「神に与えられた人生」を生きようとしています。今日の各節に出てくる「神」の存在は、12-16 節の「**太陽の下**」の世界観では皆無でした。前回（12-16 節「**一時的な所有物**」）扱った内容を振り返ってみましょう。

- ・ 富は持ち主にとって災いとなりうる。
- ・ 思わぬ不幸によって財産を奪われ、子孫に残してやる分さえ失うこともある。
- ・ 死ぬときには再び何も持たない者となる。
- ・ 富とはほんの一時だけ自分の身に伴うものであり、それ自体を人生のゴールにしてしまうところには希望のない結末が待ち受けている。

ここでは全く「神」の存在が見失われていました。まさに「神か、富か」の選択を迫られ、富に仕えた人の哀しい結末が描かれていたと言えます。しかしコヘレトは、同じ人生でありながら、そこには真逆の物の見方があることを示しているのです。それが、富を「神から与えられたもの」（賜物）として見る見方です。

興味深いことに、17 節では「神ありきの世界観」と「神なしの世界観（太陽の下）」が同居しています。ここでコヘレトが言おうとしていることは、神なしの世界観に生きていた人も、その人生に神を見出すことで、食べることに、飲むことに、働くことに、真の幸せを掴めるようになるということでしょう。

以前、時々教会を訪ねてきていたやや無気力な青年がいたのですが、「今日はここに

来る前どうしてたの？」と聞いたことがありました。すると、こんな風に答えていたのが印象的でした。「何となく起きて、食って、宿題をやって、糞して、また寝て…」。

人生に神がおられなければ、このようにまことに無機質な生活となるかもしれません。むしろ、コヘレトが勧めているのは、その人生を「神から与えられたもの」として捉えよということです。そして、飲食も労働も、神からの賜物として最大限に喜び楽しめと。

「飲食」と「労働」という二種類の営みについてふれられていますが、「飲食」の方は消費であり、それだけに偏れば目減りし続けるものです。食糧を買うにはお金がかかります。それゆえ、飲食物を買うための手段としてお金を稼ぐことがもう一方で必要となります。右手で稼ぎ、左手で食べるといったところでしょうか。確かに人生とはその繰り返しなのですが、コヘレトはその両方の営みを可能な限り楽しみ尽くすことを勧めているのです。この当たり前の営みを私たちはどれくらい楽しむことができるか。

本論 2. 富（賜物）を用いる能力

神は、富や宝を与えたすべての人に、そこから食べ、その受ける分を手にし、その労苦を楽しむよう力を与える。これこそが神の賜物である。（5:18）

ここでコヘレトが、富を持つ人が誰でもそれを楽しめると言っているのではないことに読者は注意しなくてはなりません。多くの富が与えられたとしても、その使い方が分からない人もいます。富そのものは「賜物」として与えられますが、それを用いる能力がそれ以上に重要な「賜物」となります。両者が揃ってはじめて、真に「富」は活用されると言えるでしょう。

一つ例を挙げてみます。私は以前に悪性腫瘍が見つかったことがあり、加入していた癌保険が適用されました。そのお金の一部を使って音響機材をある程度揃えたのですが、買ったのはいいものの、数回教会のコンサートで使ったきり、自分では使い方がよく分からないので、あとは押入れの奥に何年もしまっておりました。これはまさに「宝の持ち腐れ」という状態であり、本来これらは使ってこそ価値があるものです。それから少しずつ勉強して、特にこのコロナ禍のときに改めて日の目を見始めました。つまり、どんなに良い物を持っていても、用いる能力がなければ、そこには何の意味もないのです。

18 節をよく読んでみましょう。「**神は、富や宝を与えたすべての人に、そこから食べ、その受ける分を手にし、その労苦を楽しむよう力を与える。これこそが神の賜物である**」。ここでは明らかに、富や宝、飲食や労働を楽しむために用いる力が「神からの賜物」として説明されています。多くの富が与えられた人も、それ自体を喜ぶのではなく、それをどう用いるべきであるかを「賜物の授与者」である神に祈り求めるべきでしょう。

これは何も金銭だけに当てはまる事柄ではありません。人間一人ひとりに与えられている様々な能力があります。それをどのように用い、楽しみ、神と人に仕えていくかが、信仰者に問われていることなのです。

あなたがたは、それぞれ賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を用いて互いに仕えなさい。（Ⅰペテロ 4:10）

もし自分の賜物が十分に生かされていないと感じるならば、それを豊かに用いることができるよう主に祈っていく必要があるでしょう。また、能力的に不足している部分があるならば、それも与えられるように祈っていくときに、主は必ず備えてくださいます。

本論 3. 富と賜物をどう管理するか

ここでは一見、多くの富が与えられた人限定で話が進められているように読めるかもしれませんが、そうではありません。人間の目から見て「少ない」と思えたとしても、少ないなりにそれを最大限に活用し、そこに無限の喜びを見出していくことが、これもまた神からの賜物として与えられているのです。主イエスの「タラントの譬」では、5タラント、2タラント、1タラントと、それぞれ違った額の財産を預けられた人々が出てきます（マタイ 25:14-30）。この「富」は彼らの「賜物」を表しており、それをどう管理し、主人のために如何に活用して増やしたかが問われている。5タラント預かった者は5タラント増やし、2タラント預かった者は2タラント増やしました。その能力に応じた分が預けられたので、彼らは適切にそれを管理することができたのです。1タラント預けられた者も、主人から見て彼が管理できる分とはそこまでだという判断があったのでしょう。1タラントとて少ない額ではありません。しかし、彼はそれを活用することなく、ふてくされて土に埋め、そっくりそのままを主人に返したといひます。それは増えもしなければ減りもしませんでした。しかし、主人はその態度に怒ります。このときに主人が言っている言葉の中で印象深いのが「それなら銀行に預けておけば利息を受け取ることができたはずだ」（25:27）という表現です。私はこの箇所を過去に講解説教の中で扱いましたが、「銀行に預ける」とは、自分の賜物をうまく用いてくれる第三者に頼っていくことだと理解しました。自分では「宝の持ち腐れ」にしてしまうのであれば、それを役立ててくれる人に預け、活用してもらうとすることができるのです。

このように、自分には多くは与えられていないと思う人も、それで人生を悲観してはなりません。与えられた中での最善を生きることがコヘレトの勧めなのです。それも、嫌々ながら受け入れるのではなく、与えられた分（それは一方的な恵みなのですから）を精一杯管理し、その中で存分に人生を楽しむところに、賜物をお与えくださった神様

が目を細めておられる御顔が浮かんでくるのではないのでしょうか。

人は人生の日々をあまり思い返す必要はない。神がその心に喜びをもって応えてくれる。

(5:19)

この箇所を新改訳 2017 で読んでみると「こういう人は、自分の生涯のことをあれこれ思い返さない。神が彼の心を喜びで満たされるからだ」と訳されています。ここは単純に「思い出さないだろう」と訳せばよいでしょう。神から与えられた分を精一杯管理して生きている人は、くよくよすることが少ないと言われます。それはなぜなのか。おそらくそれは、自分の人生に伴っているものについて「自分のもの」とは思っていないからでしょう。すべてを「神のもの」として見ているがゆえの安心感と責任感の両面がある。活用し、増やし、神にお返しするところには大きな喜びがあります。また、仮に失敗して無くなってしまったとしても、必ずまた与えられるという信頼があるのです。神様は懐の深いお方です。

【結論】

「富」の問題を、私たちの「賜物」全般にまで広げてお話しさせていただきました。適用は本文中に十分あったと思います。メッセージは一つです。神が各々に配分しておられる人生のスタイルを受け入れ、その制限された範囲を存分に楽しみたい。「あれもこれも足りない」と考えるのではなく、預かっているものを十二分に活用し、増やし、神にお返しする人生を歩みたいと思います。

【祈り】

人間一人ひとりに良き賜物を与え賜う、天の父なる神様。私たちに与えられている「富」もまた、賜物であります。与えられたものを如何に管理するか、どう用いたかが、主の御前に問われるでしょう。私たちが自分に与えられている素晴らしい賜物を見出し、更にそれを十二分に活用し、与え主であるあなたに喜んでいただくことができますように。一人の人間にできることは多くはありません。しかし、自分の分をわきまえ、へりくだった心をもって、存分に主よりの賜物を楽しんで生きたいと思います。どうぞ感謝に溢れた一生を歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人間一人びとりに賜物を与え、ご自身の御旨のために用い賜う、父なる神の愛、
与えられた賜物を地に埋めることなく、豊かに用いさせ給いし、主イエス・キリストの
恵み、

富も能力も、己が目的のためにではなく、与え主なる主のために活用させ給う、聖霊の
親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを